

カンボジア研修風景

～参加者の感想から抜粋しました～

プノンペン市内・現地マーケット

プノンペン市中心部にあるセントラルマーケットへ。とにかく人が多い！文房具屋さんで現地の地図や教科書を発見！！初日から荷物になることは避けるためあまり購入せず。日本のゲームやデジカメなども普通に売っていた。



トゥールスレン虐殺博物館

カンボジアのポルポト政権下で起きた虐殺の歴史を現代に伝えるための博物館(元政治犯の収容所)。当時の様子を写した絵や写真は目を覆うようなものばかりで、館内の説明を聞くうちに、様々な感情が芽生えてきた。



シニア海外ボランティア

プノンペン市内の王立法律経済大学で合気道を教えているシニア海外ボランティアを訪問。礼儀・型を一生懸命に練習する学生さんたち。



理数科教育改善計画プロジェクト

内戦の影響が続き、教育環境が整っていないのが現状。教育方法についても知識をそのまま板書し、それを書き写す方法が主流で、実験や体験的な学習があまりされていない。そこで日本の国際協力(技術協力)で、より実践的な教育方法の研修をおこなっている。



移動中(プノンペン プレイヴェーン)

メコン川をフェリーで渡るまでの乗り場で遠慮なく車窓をノックする売り子の少年。「これ買わない？1ドル」ありとあらゆるものを売りにくる。風景を撮影していると一緒にフェリーに乗ってきた現地の子どもたちと仲良くなる。言葉が通じなくても、一緒に遊んでみて、どの国の子どもであっても笑顔は同じだなと思った。



青年海外協力隊

横浜市の現職小学校教諭が派遣されている現地の小学校教員養成校へ行く。日本の協力によって建てられた学校で、教室には日本製の中古の机と椅子が使われていた。机に「GLAY」と彫られているのを見つけた。ここでは、主に「援助」について考えさせられた。現地の方々は援助をすごく期待する気持ちが強いが、協力隊の方は、現地で調達できるような教材を用いて、理科の授業を実践していた。



カンボジア日本友好学園(1)

国道を曲がったところで、バイクに乗ったコンボーンさんにお会いする。彼は、この学園の責任者でポルポト政権時代に日本(神奈川県)へ難民として亡命した方。日



本で定年まで働いた後、祖国カンボジアに対して何か助けとなることがしたいという思いから、日本で寄付金を募りカンボジアに学校を設立。人材を育成することが大事と考え、卒業生には将来良い指導者になって欲しいと願っていた。

カンボジア日本友好学園(2)

休日の中、登校してくれた中高生たちと交流会をおこなう。参加教員からは、歌・踊り・劇を披露し、その後、小学校・中学校・高校のグループに分かれて模擬授業をおこなう。中学生低学年では、英語を話せる子が少なかったが、写真を見せ、踊りやゲームを取り入れ、言葉は通じないまでも一緒にたのしむことができた。

クメール伝統織物研究伝統の森(IKTT)

ここは、元京都の友禅染職人をされていた日本人が代表として、カンボジア伝統織物の復興を成し遂げた村。今は、300人の村人が暮らし機織だけではなく、農業・土木・建築、そして子どもたちのための学校まで存在する。彼とのインタビューで、「好きなことだけやればいい。でもやるからには一番を目指すべき」として、「口を開けて、待っているような人を作ってはいけない」など貴重な言葉をいただいた。出会った人が引き付けられずにいられない、魅力ある人を育てなければと、一教師として感じた。

日本地雷処理を支援する会(JMAS)

日本の自衛隊OBを中心として、地雷除去・不発弾処理を主におこなっている団体。防護服とヘルメットを身に付け、不発弾が見つかったという村々を回り、その不発弾を回収し、爆破処理するという地道な活動をおこなっている。また、同時に不発弾で人々が傷つかないように、村の中で啓蒙活動もおこなっていた。写真やイラストをもとに、子どもたちに不発弾の色・形、そして何よりも危険性を丁寧に教えていた。村人たちから「オークンチュラン(ありがとう)」と感謝されることが一番やりがいを感じる瞬間と話していた。危険と隣り合わせの中で、見返りを求めない地道な活動には、全く頭が下がるばかりだった。

CPCDO 孤児院

ここは、親を亡くし、身寄りもなくスラムで生活していた子どもたちを引き取り、生活の援助をしている施設。いわゆる孤児院(日本では児童養護施設)。乳児から18歳までの約70名の子どもたちが、11名のスタッフにより生活支援を受けている集団生活の家。子どもたちとは、とにかく輪の中に入って遊んだ。何枚も写真を一緒にとり、見えなくなるまで手を振ってお別れをする。また訪れたいと思う反面、自分に何ができるのかを考えさせる出会いとなった。

